滋賀県障害者文化芸術活動推進計画検討懇話会　第７回会議　会議録

◆　日　　時 ：令和５年(2023年)11月10日(金)　14:00-16:00
◆　開催場所 ：滋賀県危機管理センター１階　会議室３、４(大津市京町四丁目１－１)
◆　出 席 者 ：【委　員】
村田 委員(座長)、大塚 委員、川井田 委員、小石 委員、西谷 委員、松井 委員、
山下 委員、山田 委員（９名中８名出席）
【事務局】
谷口 文化スポーツ部長、萩原 文化芸術振興課長、辻 美の魅力発信推進室長、
逢坂 振興係長、梅村 主任主事、北村 障害福祉課社会活動係長　ほか
◆　議　　題 ：滋賀県障害者文化芸術活動推進計画（第２次）の素案について
◆　発言内容

発 言 者	発　言　内　容
事務局	■　開会 挨拶
事務局	■　事務局出席者の紹介・配布資料の確認・諸連絡 ■　滋賀県障害者文化芸術活動推進計画（第２次）の素案について
大塚委員	・わかりやすい版について、都道府県で取り組まれることは、素晴らしい。欲を言えば、どうしても計画は漢字が多くなってしまうので、イラストなどがあってもよいと思う。 ・計画（第１次）の期間中がコロナ禍であったため、指標のベースの数字が影響を受けており、指標を決めることが難しかったと思う。そのような状況の中でも、指標として数字を出そうとされているのは素晴らしいが、その数字の妥当性が難しいのではないか。 ・数値で測る指標と、測れない指標を持っていてもいいのかもしれない。数字の指標があれば、それを上げることが目的となってしまい、実際の状況とかけはなれるかもしれない。数字にとらわれないこともいいかもしれない。 ・計画（第１次）をふまえた課題に対して、取り組むのであれば、課題がどうなったのか対応する、わかりやすい指標があってもいいのかもしれない。例えば、鑑賞活動に重点を置くなら、事業所での鑑賞の取組状況について、コロナ前の状態まで鑑賞活動が活発になることを目指すとすると、現状がどうなったのか、もっと見えてくると思う。 ・「親しむ」「つながる」「支える」の方向性がどうしても重なってしまうため、施策として再掲が出てきてしまう。３つの柱について、全部の取組を行うという記載方法でもいいのかもしれない。分けて記載することによる大変さがある

	と思う。 ・「つながる」について、創造の過程自体に魅力があり、人と人がつながるとしているが、施策が作品に偏っている気がする。また、Ｐ23では、作品の社会的・経済的価値と記載があるが、文化芸術基本計画で触れられているのは、作品ではなく、文化芸術の持っている社会的・経済的価値について記載されている。文化芸術の作品だけが人と人をつなぐのではなく、行為自体が人と人をつなぐこともあると思う。例えば、国際交流の場面で一緒に歌を歌うなど、教育場面においても、作品発表しなくても、障害のある子もない子も一緒に表現したりする、活動を通じたつながりも含まれているので、そういった書きぶりもできるのではないか。 ・柱３の指標について、柱１の指標にも成りうるのでないか。柱ごとに分けて考えることで、大きく見せられることが、小さくなってしまっているのではないか。
川井田委員	・わかりやすい版について、文字数を圧縮したことで、第４章の部分について、指標と取組が対応していないのではないか。しっくりこないところがある。柱を合体させて記載したほうが伝わるのではないかと思う。 ・また、わかりやすい版Ｐ７「障害のある人の観覧料を無料にします」は、誤解を招く記載である。観覧料が無料になるのは、手帳所持の人であるが、計画上の障害のある人との定義と異なるので、誤解を招くのではないか。 ・わかりやすい版Ｐ５インクルーシブの定義について、単純化しすぎて、意味が異なっている。再検討していただけたらと。
小石委員	・わかりやすい版Ｐ９について、まちプロ一座は、人権や生涯学習の分野で、公演依頼をいただいており、文化芸術という方面で、演劇をする機会がなかったので、この計画をきっかけに、県だけでなく、市町とも連携して、取り組んではどうか。
種田支援員	・まちプロの取組の歴史を振り返ったところ、これまで、自治会、障害理解の啓発、人権学習など、様々なところから公演依頼をいただいているが、まちプロが行っていることは、演劇である。僕たちが行っているのは、指標で測れないことであり、お芝居を通して、お客さんに伝えたいと思っている。入り口はどうであれ、お芝居にたどり着けないかという思いを持っている。
小石委員	・わかりやすい版Ｐ７創造の機会の拡充に向けてについて、県内の学校とのワークショップでは、ぜひ一緒に作品を作りたいと思っている。

種田支援員	・小中高校から人権学習として、公演を依頼されることが多い。学校のカリキュラムが決まっているから難しいと思うが、劇団員たちは、「子どもとは１回しか出会えないので、その中で 10 分でもいいので、一緒に何か作りたい」と話している。僕たちなりの作品作りなので、プロ的かどうかは難しいが、障害のあるなしに関わらず、お芝居をつくっている劇団なので、「『こんな感じでお芝居やってるよー』とか、お話する機会があればいいな」と、劇団員は話している。
村田座長	・わかりやすい版について、課題があるとおしゃっていたが、印刷をする際には、イラストをたくさん入れるなどの予定はあるか。
事務局	・空白にイラスト等を入れる予定であるが、デザインを発注するのではなく、事務局が作成したものを印刷する予定である。
村田座長	・難しいと思うが、限られた文字数で整理しようとすると、誤解を招く可能性がある。わかりやすい版では、本体で記載されている施策をピックアップし記載しているが、本体で（　）で記載されている項目を抜き出し、整理した方がいいのではないかと感じた。情報量が限られており、具体性が無くなってしまう可能性があるが、施策を一つだけ持ってくると、シンプルすぎて、また目立ちすぎて、誤解が生じやすいこともあるかもしれない。わかりやすい版については、いろんな観点で、検討の余地があれば、考えていただきたい。 ・数値にとらわれないことも大事という御意見について、なるほどと思う。行政に携わっていた経験から、数値目標は非常に重要であるが、数字を上げることだけに注力してしまうこともある。それをカバーする一つの方策として、モニタリングの時点で、定性的な指標も押さえるべきだと思う。 ・少し脱線するかもしれないが、広報課長の時に、大河ドラマで真田丸が上映された。石田三成のイメージを良くできる機会として、動画を作成した。ＫＰＩの目標値は５万回再生であったが、実際200万回超えの再生となった。テレビで取り上げられたが、行政上の成果としては出てこない。行政では、アウトプット的なものが多いが、アウトプットによって、社会にどんなインパクトを与えたか、エピソードでもいいので、定性的にわかりやすく伝えられるような努力をすれば、リアリティーを持って施策の成果が伝えられるのではないか。 ・小石委員の発言について、市町や学校など、基礎自治体への役割に期待されるところが多かった。私もとても大事だと思う。県は、全国の中でもトップランナーとして取組をしてきたが、住民生活や福祉の現場に直結しているのは、市

	町や学校なので、そこにどれだけ取り組んでもらえるのかが大事ではないか。計画（第１次）では、拠点づくりなど、目玉となる事業があったが、今回は無いという話をした。計画（第２次）では、何か大きいことをする、箱モノを作るのではなく、誰もが文化芸術に親しめる、創造するという当たり前のことをする拠り所だと思うので、派手なことをしていなくても、県がしっかり方向性を持つとともに、さらに大事なことは、市町に計画や体制整備の重要性、少しずつでも事業を進めていくことの必要性を伝えることが大事だと思う。地方自治の本旨としては、県が市町にこうしなさいと書くことはできない。強制的には書けないとしても、地道に市町や学校現場の取組が広がっているようなことを記載していただいている。
西谷委員	・計画（第１次）、計画（第２次）のどちらにおいても、第５章で、計画の推進について記載されているが、計画（第１次）の推進がどこまで反映されているのかだろうかと正直思っている。県内の文化施設に対して、この計画がどこまで下りているのか、各市町や県の施設でも共有されていないことがあった。計画を作ることが目的となっていないか。計画を作っても実行されていないと全く意味がない。計画（第２次）では、計画策定後、実施できるような体制をとれないのかと思う。まちプロさんの御意見もあったが、ご縁があり、令和２年度から、県や財団と取組をさせていただいているが、これが本来は各市町のホールが、こぞって参加してもらってこそ、目標の数値に達成できるのではないかと思う。県だけの施設では、目標の達成は難しいと思う。県内19市町あり、20以上のホールがある。全部とは言わないが、半分くらいのホールが年に１～２回取り組めば達成できると思う。実行に移すことができれば、目標値の１万人はあまりにも少ない数字だと思う。各ホールが協力すれば、すぐに達成できる数字である。それぐらいの思いをもって、進めていただきたい。県内のホールは、年に２回館長会議を行っているので、そこで提案し、実務会議など、担当者が集まって、このことを真剣に話し合う場があって、取り組める施設、サポートとして協力できる施設など、県内の文化施設が手を挙げて取り組めば、よりよい取組ができるのではないか。実際、県から、そういった声掛けをいただいたことで、参加することができた。他の施設としては、声掛けをされていないから、聞いていないから他人事としてとらえている施設があるのではないか。指定管理者が、市町の障害部署と取り組めればよいが、なかなか難しいこともある。それを乗り越えて、パートナーシップを取り、さまざまな取組をすることで、来年、まちプロさんと取り組むようなことが、県内の文化施設でツアーみたいなことができればよい。そうすることで、滋賀県が一歩も二歩も進んだ取組を行う県であると認識してもらえるし、策定した計画が実行に移せる

	ような体制を組んでいただきたい。県から命令はできないが、文化施設の館長が集まる場で、議題として挙げていただき、協力する施設を募り、取組を進めていけば、かなり広がっていくと思う。策定した計画を活かしていただきたい。
村田座長	・私も計画を作りっぱなしにするのではなく、作った後は地道な取組が大事だと思う。館長会議の御紹介があったが、次回は１月を予定していると思うので、パブコメの時期である。計画策定を行っていることを話していただくことや、各施設の研修で、計画の趣旨を理解していただくなど、常日頃から意識づけをするところから、進めていただいたらどうか。ご検討よろしくお願いしたい。
松井委員	・親しむの指標である、拠点づくり事業と連携したことがある市町について、連携した市町が増えていくことも大事であるが、その市町が継続的に続けていくことが大事だと思うので、継続されているかという視点もあるといいなと思った。 ・県立の施設の取組の事例が、市町や民間に共有されていくことが大事だと思うので、県立施設や地域、民間とのネットワーク、共有する仕組みが計画で記載されると良いと思った。 ・３つの指標をまとめて記載した方がしっくりくるなという印象を持った。文化芸術の取組を評価することが難しいと感じており、「変化があった」「こういうことがあった」ということも測れればよいと思った。 ・ＮＯ－ＭＡでは、わかりやすい美術館ガイドやアイサでもわかりやすい版のリーフレットを作っている。厚労省で作成されているわかりやすい情報提供ガイドラインを作成された大阪の「手をつなぐ育成会」さんにヒアリングを行い、当事者の方にもモニタリングをして作成した。もう少しかみ砕いた言葉にすることや視覚的にもわかりやすい形にしてはどうか。
山下委員	・障害に対する正しい理解を深めた上で、計画を読むと、すべての方に内容が分かりやすくなるのではないかと思った。 ・「推進します」という言葉があるが、例えば、「何月頃にします」と記載できれば、計画がより魅力的になると思う。 ・全国各地で素晴らしい取組がたくさんあるので、その取組を具体的に書くことで、県民の皆さんにとって、わかりやすくイメージできるのではないか。 ・わかりやすい版についても、やまなみの利用者に当てはめると、中程度の障害がある人にしか分からない内容になっている。やまなみで活動しているほとんどの人は字が読めなかったりするので、内容を届けるためには、周りにいる人

	に理解してもらうことが必要である。その方々が、知ろうとする内容になっていることが重要であるし、ＱＲコードがあり、スマホが音声で説明したり、視覚的に説明することもできるので、そんなことができればいいと思う。
村田座長	・わかりやすい版について、わかりやすくするというのは、漢字を少なくする、文章を短くするだけでなく、他の事例を入れるなど、別の観点で分かりやすくできる手法があるかもしれない。
松井委員	・大阪の手をつなぐ育成会にヒアリングした際、例示の記載や図があるとわかりやすいとおっしゃっていた。ＮＯ－ＭＡでは、日本語、英語、やさしい言葉の３言語で作成しているが、実は、どのお客さんもやさしい言葉リーフレットを見てから、日本語のリーフレットを手に取られる。障害の無い方にもやさしく、わかりやすくなっている。
村田座長	・改良の余地があれば、ご検討いただきたい。
山田委員	・わかりやすい版について、ひらがなを振っていても漢字が多い。対象にもよるが、例えば、小学生以下の子どもが見るとすると、わかりやすい版のＰ３のように、イラストを入れるなどすると、イメージがもちやすい。 ・つながるについて、特別支援学校においても、たくさんのところとつながるという取組をしている。また、つちっこプログラムが記載されていたが、計画（第１次）では、芸術家の派遣事業について記載されていたので、継続事業であれば、計画（第２次）でも記載していただければと思う。 ・Ｐ23障害者の文化芸術作品の社会的・経済的価値の理解促進にむけてについて、子どもたちの得意なこと、普段やっていることが、評価され、すごく価値のあるものであることがある。このような視点を発信することが大事だと思う。付加価値があるということは、滋賀県全体が元気になる源になると思うので、計画でも、啓発や取組を発信するようしていかなければならないと思う。学校でも取り組んでいきたい。
村田座長	・欠席されている保坂館長の御意見を御紹介する。 ・「本体Ｐ20ユニバーサルデザインに配慮した設計を行うことで、特に子どもたちがワクワクできるような展示体験を計画します。（再掲）とあるが、ユニバーサルデザインは、展示の内容自体には直接には関係しない。」という表現についての御意見があった。 ・「本体Ｐ19の評価指標のうち、公募展の応募者数の目標値を300人に設定して

	いるが、現状より９名増加となることが、果たして活性化と言えるのか」という御意見があった。 ・また「Ｐ20デジタル技術の活用と記載されているが、県立の文化施設だけでなく、いろんな公募展でも実施されるべきではないか」という観点や「Ｐ20「誰もが優れた美術作品を鑑賞」できると記載があるが、多様な美術作品をストレスなく体験するという方向性が重要ではないか」という御指摘をいただいている。 ・「Ｐ21障害のある人の創造活動を提供することについて、他府県で開催される公募展では、障害者からの応募があり、入選しているケースがある。こうした事例が滋賀県でもあったかのかどうか確認した上で、もしなかった場合、あるいは事例として少ないのであれば、どのようにすれば現状が改善されるかを検討すべき」という御意見があった。 ・滋賀県では、障害のある方の枠を設けていないが、過去にアール・ブリュット作家が一般の枠で応募されて受賞されたことがある。作品が評価されたということであるが、そういったことについて、どのように取り組んでいくのかという御意見であった。
山下委員	・「やさしいことば」を存じていなかったが、「子ども・子ども・子ども」に関連して、子どもに向けて発信することを大切に考えるのであれば、子ども向けのバージョンを作った方がよいのではないかと思った。滋賀県では、何歳までを子どもと整理しているか分からないが、すべての子どもたちがこの計画を知る機会を持ち、子どもたちが理解できる計画を作れば、５年度、10年後、20年後、変わってくると思う。特に、「観点」「視点」「推進」「課題」という言葉は、子どもにとっては読む気にならないと思う。 ・子どもに障害がなにかと聞くと、車いすに乗っている人と言う。今回のイラストでも車いすのイラストを使用すると、そういうイメージを植え付けてしまうのではないか。 ・作成するのであれば、滋賀県にある素晴らしい作品をふんだんに使ったリーフレットを作成できれば、滋賀県の特徴を踏まえたリーフレットの作成ができるのではないか。
村田館長	・県では、子ども向けのものを作った事例もあると思うが、あまり聞いたことがない。大変かもしれないが、例えば、小学３～４年生までの漢字や語彙だけで作るなどチャレンジできれば素晴らしいと思う。
大塚委員	・アイサにノウハウがあるので、協力して取り組まれたらいいと思う。コロナの

	初期の際に、全国手をつなぐ育成会が作成した感染予防の啓発ポスターがとても分かりやすかった。イラストが入っており、やさしい日本語で作られていた。アイサのノウハウややまなみ工房のイラストなど、滋賀県にいっぱいリソースがあるので、活用されたらよいと思う。 ・「子ども・子ども・子ども」の施策として、リーフレットを配布することも、いいアイデアだと思う。 ・指標を数値で測らず、どんな変化があったかをモニタリングの過程で測ってもいいのではないか。例えば、令和10年度までの目標に向けて取組を進めながら、定期的に館長会議の場で、取組に関する御意見を聞く場をいただき、こんな意見が出てくるようになったという変化を入れるというような。 ・館長会議の場だけでなく、各委員が関わられている地域の人が集まる場で、モニタリングすることはできるのではないか。 ・文化芸術の文脈ではなく、他の分野においても演劇の場があるということが、計画（第２次）では、見えていなくてもったいない。そういったことが、文化芸術の社会的価値だと思う。作品の魅力だけではなく、演劇を通じて、人と人がつながる交流がなされているということなので、文化芸術が、生涯学習、人権、医療、まちづくりなどに関わっていることも丁寧に見ていくと、個々に記載のあるもの以外にも取組がされているのではないか。
小石委員	・文化芸術を支える人について、お客さんや主催者、ホールのスタッフなどいろいろな人がいるが、公演依頼を受けた時に、台本を読み込み、まちプロの意図を理解しようと、アドバイスしてくれるホールのスタッフさんがいる。まちプロは、自分たちだけで取り組んでいるので、演出の効果やお客さんへの伝え方など知らないことがたくさんある。劇団としては、施設のスタッフの方ともう少し関係を構築したいと思っている。
村田館長	・現場の熱意が施設によって異なる。個人の力量が低いというわけではない。市町の担当職員やホール職員同士の横のつながりがない印象がある。県という広域自治体が、混ざり合う場を持つことが大事。全部仕込むのではなく、関係者同士に出会ってもらい、情報共有し、思いを伝え合うことで、質が上がっていくと思う。計画には書ききれないと思うが、実際の取組の中で意識してもらえればよいと思う。
山下委員	・昨年、やまなみ工房では、甲賀市内の全ての小学校中学校を対象に、教室ミュージアムを行い、全ての子どもたちから寄せられた感想をあいこうか市民ホールに展示し、作品と一緒に展示会を行った。

	・今年は、全ての幼い子どもたちにというメッセージで、０歳から５歳児を無料招待し、全ての保育園で作品展示した後、障害のある人達の作品を使った絵本をオリジナルで出版し、子どもたちにプレゼントするとともに、多様性や障害への理解を深めるためのオリジナルソングを作って、２月にあいこうか市民ホールで、障害のある人と障害のない人で発表する催しを行う予定。 ・それだけでは、なかなかお客さんが集まらないので、著名なアーティストやタレントに来ていただく。舞台もやまなみ工房の作品で作り、ホワイエにもこれでもかとやまなみの作品を展示することで、だいすけお兄さんを見に来た子どもたちとお父さんお母さんが、楽しみながら作品に触れる機会を作っていきたいと思っている。障害がどうこうではなく、生で障害のある人に出会える機会がいいなと思い、このような催しを予定している。
山田委員	・幼稚部では、芸術家派遣事業を活用し、学芸員をお招きして、壁一面に、絵を描くといった取組をした。子どもたちが夢中で描いている絵は、これまでの学校行事を振り返る意味のある芸術作品であり、貴重な機会をいただけたと思っている。他の取組も参考にさせていただき、学校としては、これからも様々な取組を行うとともに、校内での周知とＨＰ等で、発信していきたい。
村田座長	・県内でもすばらしい取組があるので、共有し、発信していく重要性について、その通りだと思う。
大塚委員	・具体的な取組として、記載する必要は無いと思うが、取り組んでもらいたいこととして、公募展などの審査委員にいろんな人が入られるようにされるとよいと思う。年齢、ジェンダー、専門性など多様なバックグラウンドの審査員が、審査することで、いろんなことに気付くことができると思う。どういう発表の場を作っていくか、何を取り組んでいくかを決める場においても、インクルーシブ、ユニバーサルであってほしいと思う。
村田座長	・県において方針や意思決定を行う際には、女性の参画が進んでいると思う。多様な主体がそういう場面に関わっていくということが、これだけでなく、県全体の方針としてあってもいいのかもしれない。特に、障害者の文化芸術という分野では、そういった意識があった方がいいだろうと思う。県の審議会でも、当事者の方に参画いただくこともあると思うが、公募展の審査の場面など、他の場面においても必要なのかもしれない。すぐに計画に書けるか分からないが、意識してもらいたいと思う。

川井田委員	・各都道府県で異なるとは思うが、パブリックコメントの実施方法はどうなっているのか。わかりやすい版をどのように活用し、意見を収集する予定か。
事務局	・一般的にパブリックコメントを実施する際には、県ＨＰなどで１か月程度、意見募集を行う。今回の計画では、当事者の方に計画を知っていただき、意見をいただきたいという思いがあり、わかりやすい版を作成しているので、当事者団体に対して、直接お知らせを行う予定をしている。
事務局（障害福祉課）	・障害福祉課では、意思疎通に関する条例を作成しており、同じくわかりやすい版を作成している。当事者団体に対しては、郵送とメールで周知の依頼をさせてもらっている。先ほど委員から御意見があったように、当事者の周りの人に理解していただき、当事者に説明していただきたいと思っており、今回の計画でも同じように周知したいと考えている。
事務局	・評価指標を考えることに苦労した。取り組んだ実績があるものは、過去の前例があるので、目標を立てることができるが、計画（第２次）では、これまで意識的に取り組んでいなかった分野に、目標を立てることにしたい。また、定性的な目標を立てることは重要だが、まずは、定量的な目標を立て取り組んでからになると考えている。 ・いただいた御意見のように、計画の周知が十分にできていないということを課題として認識している。館長会議等で、説明させていただき、館の職員や市町職員に、障害者の文化芸術に対する意識を向けてもらい、実際に出演する人たちが取り組みやすいようにしたいと思う。計画を策定した後も重要ということを改めて認識したので、来年度以降、尽力していきたい。
事務局	挨拶
事務局	■　閉会